



アグリビジネス学科同窓新聞

-発行-

秋田県南秋田郡大潟村字南2-2
秋田県立大学生物資源科学部
アグリビジネス学科
TEL 0185-45-2026(代)
印刷: 株式会社 湯田印刷
TEL 018-875-4005

大潟キャンパスの四季より



フィールド教育研究センター長
露崎 浩

こちら大潟キャンパスは、雪の日が多くなりました。卒業生の皆さん、お変わりありませんでしょうか。私は、平成29年4月よりフィールド教育研究センター長(アグリビジネス学科教授兼任)を務めています。

本稿では、フィールド教育研究センター(以下、センター)の近況を、季節をおいて紹介します。

【秋】今年も、海外の大学の多くの学生が、センターを見学しました。タイなどの熱帯地域から来た大学生は、木に実っているリンゴに歓声を上げます。生木を見て初めて、リンゴの木とっては「当たり前」が、人によっては初めてで「驚き」になるのです。

【冬】センターでは、幼稚園児や小学生を受入れ、イネ作り体験などをしてもらっています。大潟小学校で私がイネ作りの話をした後「質問は?」と聞くと、「ハイ!」「ハイ!」「ハイ!」と児童ほぼ全員の手が挙が



り、びつくりしました。そんな具合の講義が大学でもできるような頑張りです!(笑)。12月には、大潟小学校の児童が、収穫したお米でだまこ餅をつくり、私どもにも振る舞ってくれる予定です。

【春】圃場から雪が消えるころ、イネや野菜作りが本格化します。アグリビジネス学科の新4年生の多くの学生さんが、センターへ来てプロジェクト卒業研究に取り組みようになりま

す。圃場や園芸温室あるいは畜舎などで、作物や家畜を観察し、調査やサンプリングを始めます。南の池公園のサクラの花が、そんな皆さんにエールをおくりま

す。【夏】センターには、夏になると、白いラップで包まれた大きな丸い玉が草地に置かれます。これは、収穫した牧草を保管するためのものです。ある夏の早朝、その丸い玉の上に座り遠くを眺めている学生がいました。何を思い考えていたのでしょうか。



草地に置かれた丸い玉(本文【夏】を参照のこと)

卒業生の皆様は、それぞれの地で忙しい毎日を送っていることでしょう。そのようななかでも時には、大潟キャンパスの四季を振り返ってみてください。あのころの「あなた」が、これからの「あなた」に、何かを語りかけるかもしれません。

現在、フィールド教育研究センターの教員は、私のほかに、濱野美夫准教授(畜産分野)、今西弘幸准教授(園芸分野)、保田謙太郎准教授(作物分野)、そして矢治幸夫客員教授(農業機械分野)がおります。私も教員一同、卒業生の皆様とセンターに立ち寄ってくださることを待っています。(平成29年11月記)

同窓生からの近況報告

2期 生産環境プロジェクト 大内 威人

2期生の大内威人と申します。今回、同窓新聞にて紙面を割っていただき大変嬉しく思います。この場をかりて学生時代の思い出や近況の報告等をさせていただきます。と思います。

学生時代の思い出は、1年次の泊まり込みでの実習や2年次の実験、3・4年次のプロジェクト活動、大学院での学会発表など書ききれないほどありますが、数多くある思い出の中でも特に印象に残っているのは、自分で決めたひとつのテーマについて深く掘り下げて研究に取り組んだ大学院での思い出です。私は、大学院では水田を中心とした水環境の中での外来魚(とくにオオクチバスとブルーギル)の遊泳特性についての研究に取り組みました。研究では、対象

の魚を実験水路で遊泳させて実験を行いました。生き物を用いた実験なので、実験水路での挙動が安定せず、より実際の水路での遊泳に近い有効な実験データを得るために実験装置や方法を、供試魚の飼育環境などを何度も見直しました。夜遅くまで実験を行い、その後のデータ集計や論文の作成は日付が変わってしまいうこともしばしばありました。が、その度に遅くまで指導してくださった永吉先生には大変感謝しております。

現在、私は福島市役所に勤務しております。昨年度までは農林整備課に所属し、農業用水路や農道の整備を主に行っておりました。今年度、5年目の定期異動により水道局に異動となり、現在は漏水が発生した水道管の修繕を行っております。市民の皆さまへ安心・安全な水道水を安定して供給するために、日々業務に取り組んでおります。

新しい部署に異動したばかりで、まだまだ戸惑うこともあり、市民の皆さまからより信頼される市政を目指してこれからも精進していきます。

4期 農業政策研究プロジェクト 梅村 真末

アグリ4期生の梅村と申します。今回同窓新聞にて近況報告をする機会を頂き、ありがとうございます。今度こそ、ごきざい。学部時は旧6プロに所属し、大学院修了後は住友生命保険相互会社に入社しました。現在は生命保険の営業をしています。最初は上手に話せるか不安でしたが、3年目になりお客様も増え有り難く思っています。休日は月に1回、6期生

の石村君と酒井先生の研究室事務をしていた佐藤曳地さんの3人で「だまこ鍋」を作って食べたりに楽しく過ごしています。最近10月に酒井先生が出張で東京にいらっしゃったので、仕事終わりにご飯に誘って頂きました。研究室で卒論の打ち合わせしながら六花亭のお菓子を食べていた頃と変わらない関係が今も続いていることに感謝しています。

大学院時代にアグリ学科の同窓会役員として、風ネットの導入の打ち合わせに参加させて頂きました。その際、他の学科の先生方の出身大学の卒業生交流の様子などを聞き、主体の年齢層が高い同窓会と比べて、県大は卒業生も若く仕事や私生活が忙しいため、同窓会活動は活発とは言えないという現状を知りました。今年2月に発行された同窓新聞創刊号をホームページから拝見し、学科の変化やプロジェクトの近況を読みま

した。集まることは難しくてもこのような場があるのは良いと思います。大学の同窓会活動に日程や場所の都合で参加出来ない身ですが、10年後などに皆様と会うことができることを楽しみにしています。

6期 大規模農業経営プロジェクト 小野 竜祐

6期生の小野竜祐と申します。今回、同窓新聞の紙面を割っていただく機会を得ましたので、近況等報告させていただきます。私は現在、地元、群馬に戻りJA甘楽富岡で勤務しています。幸い、希望していた営農部に配属され、その中で生産者が持つてくる

野果や果物、花きなどを市場等に販売する部署に勤めております。出荷物の販売等は各市場の市況を比較し、高値を付けてもらえる市場に出荷します。また、各生産者同士で農産物の規格を統一させるための「目揃え会」や栽培に関する講習会を開き、より良いものを出荷してもらうための生産振興に努めています。今、原稿を書いている冬から春にかけては下仁田ネギやニラの出荷が最盛期を迎え、集出荷から販売に追われる日々が続いています。

学部生時代を振り返ると、3・4年次のプロジェクト活動を思い出します。圃場での活動や大学外での研修はとても楽しく、身に

8期 家畜資源循環農業経営プロジェクト 山崎 美憂

卒業して半年以上が経ちましたが、今回こうして大学の企画の一部に関わることができ、非常に嬉しく思います。僭越ですが、私の近況について書かせていただきました。と思います。

私は現在、長野県にあるスーパーマーケットの精肉部門に勤めています。就活のときから精肉部門を希望していましたが、入社当初はサービスマンに配属され、レジ打ちやお客様対応などの仕事をしていました。上司や店舗にも恵まれて日々の仕事に取り組みしていました。思いも捨てられませんでした。なので様々な機会です。店長や本部に、精肉部門になれないかアピールをしました。社内では精肉部門に配属された女性社員の前例が

なるものでした。4年次の卒業論文では、先輩が研究していた「緑肥作物が後作物に及ぼす影響」について、引き継ぐ形で取り組みました。今思うと、もう少し研究活動に取り組めば、より良い卒業論文ができたのではないかと少し後悔しています。そして指導してくださった露崎浩先生をはじめとする先生方に加え、卒業後も研究をサポートしてくださった小野未来先輩、同じプロジェクトのメンバーにはとてもお世話になりました。感謝しています。

最後に、まだまだ社会人、JA職員として未熟者ですが、大学で学んだことを生かし、地域のために精進していきたいと思っています。

なく、難しいといった反応が続きましたが、アピールの効果があつたのか精肉部門への異動命令が出ました。そして現在、3プロでの実習などの経験があることや女性初の生鮮部門の社員ということもあり、かなりの期待とプレッシャーの中、今までと全く違う仕事に取り組みしています。今、特に苦労している仕事は、塊で入荷する豚の肩肉から、余計な脂や筋・リンパなどをとり整形する作業です。肉の下の太筋や脂肪の中のリンパなどを包丁を上手く使つてとることが難しく、思うようにいかない悔しさを毎日感じています。が、やりがいも感じています。

まだまだひよつこの私ですが、学生の皆さんには、新人でも意欲を見せることでチャンスが巡ってくることをあると心の端に留めておいてもらえたらと思っています。

各プロジェクトの近況

アグリビジネス学科教員 (平成29年夏)



写真上部▽伊藤 近藤 酒井 藤井 林
後列▽永澤 佐藤正 飯心、吉田 神田 横尾 赤堀 永吉
前列▽佐藤 露崎 瀬川 津田 荒穂 佐藤加現在弘前大、山本

先進作物生産技術開発プロジェクト (旧大規模農業経営プロジェクト)

まず、卒業生には驚きかと思えますが、私たちの所属名(アグリ)のプロジェクト名が変更になりました。大規模農業経営プロジェクトは「アグリ」の数字の使用も禁止です。先進作物生産技術開発プロジェクト(作物プロ)が新しい名前です。作物プロには、新しい山本聡史先生がいらつしやいました。山本先生を加えて、露崎先生とわたしとFCの保田謙太郎先生とで、やっと4人体制に戻りました。研究室の活動内容は近年の活動と大差ないですが、先進作物らしく、山本先生はAIなんか取り入れてい

永澤 信洋 記

先進園芸技術開発プロジェクト (旧園芸作経営プロジェクト)

現在の所属は、3年生10名、4年生は9名です。3年生は、例年の販売に向けた栽培や研究活動を学修中です。4年生は、就活も終わり、現在は卒論に没頭中です。今年は、ゼミを強化するため、発表後に「わかりやすかったか?」等の発表スキルアンケートを実施し、その評価と質問内容を次回にゼミ担当時に回答する仕組みを導入しました。来年度は、プレゼンのスキルアップにつながる仕組みを考え中です。就活も順調に決まり、農業資材関係、JA関係、小売業、食品関係およびフラワー業界に内定がなければ、後輩に会うことがあれば

吉田 康徳 記

家畜資源利用推進プロジェクト (旧家畜資源循環農業経営プロジェクト)

本号の近況報告は、佐藤勝祥が担当いたします。同窓生の皆さんの中には「誰だお前は?」という方もいらっしゃると思いますが、平成26年10月から食肉生産科学研究室の助教として勤務しております。どうぞ、よろしくお願いいたします。今年度の畜産プロジェクトは、濱野先生、横尾先生、私の教員3名と3年生7名、4年生6名でプロジェクト活動をこなしてきています。大きなイベントとして、5年毎に開催される全国和牛能力共進会が仙台で開催され、教員と3、4年生で研修に行つて参りました。日本の牛肉生産のあり方を考える、良い機会となりました。11月からは畜産資源循環利用学研究室の助教として伊藤謙先生が紹介されました(新任教員紹介欄もご覧ください)。伊藤先生の加入によって、畜産プロジェクトの平均年齢が若くなりました。みなさん機会があればぜひお立ち寄りください。お待ちしております。

佐藤 勝祥 記

次世代農業基盤創成プロジェクト (旧生産環境プロジェクト)

生産環境プロジェクトは今年から、次世代農業基盤創成プロジェクト、と名称を改めました。略称は、基盤プロです。名称は変わっても、農業農村の基盤を支える役割を明確にしつつ生産性向上、水利施設等のスマートな、防災力強化、そして共生・持続性・環境負荷抑制の4本柱は引継がれています。現在3年生7名、4年生4名、院生1名で秋田はもとより全国を対象に地域エネルギー活用や基盤保全等の新技術を学び研究しています。昨年の卒業生の就職先は秋田県庁3名、農林水産省2名、JR東海1名で

近藤 正 記

地域ビジネス革新プロジェクト (旧アグリビジネスマネジメントプロジェクト)

地域ビジネス革新プロジェクト(略称 ビジネスプロ)の近況です。できるだけ5プロと言わないようにして半年以上たちました。今年度は現在3年生4人と4年生7人とを合わせ11人のメンバーで活動しています。定番の地域交流はますます盛ん、JAおはこ青年部協和支部の皆さんとの交流の中で、JR東日本の中堅若手の社員の方たちとの交流も始まりました。23万部の発行数を誇る全国雑誌「地上」9月号のセンター写真記事にこの青年部との交流記事が大きく取り上げられました。秋の宿泊合宿は「陽気な母さんの会

津田 涉 記

政策・経営マネジメントプロジェクト (旧農業政策研究プロジェクト)

教員の5名体制に変更はありませんが、異動が多発した1年でした。本紙前号に記した平成28年10月の格真一助教(現在は愛媛大学准教授)の転出につづき、平成29年3月には李准美助教(現在は岐阜大学准教授)、9月には佐藤加寿子准教授(現在は弘前大学准教授)も転出してしまいました。一方、後任は4月着任の政策分野の赤堀弘助教の1名のみで、現在は私(瀬川洋樹)と藤井吉隆准教授の3名となっています。赤堀助教はバリバリの20代で、学年初の計量経済分野の新鋭です。一方、平成29年度の学生

瀬川 洋樹 記

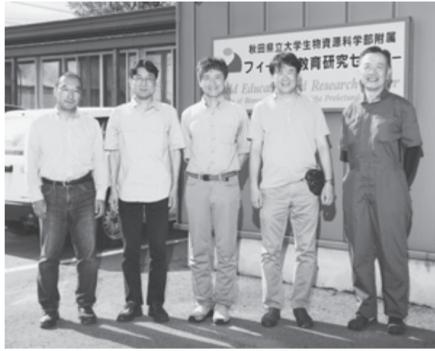
フィールド教育 特集

今号では、皆さんが在学時に農業技術実習(旧農業農村実習)やプロジェクト実習、卒業研究などで活動してきた場所であるフィールド教育研究センターを特集します。

畜産班担当教員 濱野 美夫

同窓生のみさん、お元気ですか。フィールド教育研究センターでは、今年度4月よりセンター長が矢治教授から露崎教授(兼任)にバトンタッチされました。私は、当センターに移って早、4年目となりました。今回は畜産班の現況について簡単に伝えたいです。平成22年度から増やしてきた日本短角牛は32頭になりました。繁殖・肥育の一貫生産の下で定時定量出荷するという、当初の目標に掲げた体制には至っていませんが、自家繁殖による繁殖

フィールド教育研究センター教員 (平成29年夏)



▲左から：保田、今西、露崎、濱野、矢治

用雌牛を確保するところまでは到達しました。今年度は量出荷に向けて増やしていく段階に移ったところで、飼育している肥育中の去勢牛は5頭、育成牛の雄は2頭いますので、概ね肥育牛の増産は順調に進んでいます。さて、当センター産の日本短角種の牛肉は、これまでに松風祭で提供された経験があります。最近では例年7月に開催しているフィールド教育研究センター1期開会デーにおける牛肉の試食コーナーにて提供しています。ここでは、お役目が終わった繁殖用雌牛を出荷し、当センター産の牛肉をパーベキュー方式の焼

機械・作業管理技術スタッフ 伊藤 慶輝

同窓生の皆様お元気でしょうか。現在、フィールド教育研究センターの機械・作業管理班を担当して3年目の伊藤慶輝と申します。以前は秋田キャンパス実験場兼センターの作務班に5年間所属し、現在に至ります。私はアグリビジネス学科の前身である農業短大の卒業生です。母校で勤務していることにあります。フィールド教育研究センターの各施設が、20年以上も前の在学中とほぼ変わりがないことから、学生の頃の思い出がそのままの状態の中で勤務しております。勤務内容としては、フィールド教育研究センターが保有する大型機械から小型管理機械まで沢山の機械の点検や整備、軽油給油スタンドの管理、場内で使用している公用車のタイヤ交換、重機を用いたの農業土木、そして広大な面積を誇る圃場や農道脇の除草、農道整備として砕石の敷き均し等々、通常管理として行っている作業も含まれています。冬期間は大潟キャンパス全体(寮の駐車場を含みます)の除雪作業も行っています。教育に関しては、主

肉で来場者に召し上がっていただいています。今年度は、米場者が倍増し、用意した350食が30分程度でなくなってしまうほど、多くの人に日本短角種の赤身肉の美味しさを堪能してもらったことができた。この開放デーには毎年来てくれている同窓生の方々もいて

ますので、多くの皆さんのご来場をお待ちしております。最後はイベントの宣伝になってしまいましたが、このように畜産班では、日本短角種の生産を軸とする資源循環型の畜産体系を特色として、今後畜産に関する教育研究の発展に努めていきます。

に学生実習で行うトラクター運転や作業機械操作の指導、鉄の切断・溶接、ボイル盤穴開け・研磨・溶断のの違いを理解してもらった様々な種類の油脂類を準備し、臭いや色で違いを体験してもらっています。学生実習で特に思うことは、今の学生さんとはとても素直だと言っています。学生の皆さんにトラクター運転の指導を行うと最初の操作で飲み込みが早く、こちらで指示した通りにやり遂げ降りる時には笑顔の学生さんが大半です。当たり前のことのように感じますが、私の在学中の頃は、農家出身者が多く、また実際の経験者も多く、教職員に教えられるよりもそれより上手に操作し、よく怒られたものでした(笑)。研究に関しては、機械・作業管理班の担当教員である矢治客員教授によるGPS無人自動田植機の研究において、機械部品の作成や加工、学生寮屋上でのアンテナ設置など行っています。講義や機会があった時には、学生の皆さんにも自動田植機へ試乗してもらい、近未来の農業の一端を感じてもらっています。同窓生の皆様ぜひフィールド教育研究センターへ訪問してみてください、お待ちしております!

佐藤正志先生を偲んで

佐藤正志先生が平成29年8月10日にご逝去されました。あまりの突然の出来事に、私達も大きな衝撃を受けています。故人とゆかりの深いOB教員ならびに果樹チームの卒業生に追悼の言葉をよせていただきました。故人のご冥福をお祈りします。

元園芸作経営プロジェクト 教員 高橋 春實

8月の旧盆間近のある日、吉田康徳先生から電話があり佐藤正志先生が急逝されたことを知り、ことだったのが、最初は信じられませんでした。時の経過とともに現実のこととして受けとめることができました。私が秋田県立農業短期大学に赴任したのは昭和52年4月ですが、その時はじめて正志先生にお会いしました。先生も私も所属が附属農場の園芸部門で二人相部屋だったこともあり、教育・研究から趣味のことまで幅広く話しました。先生は農業短期大学時代から秋田県立大学生物資源科学部時代まで一貫してリングゴの育種や栽培学的な研究に取り組まれていたことが、はじめの頃は日々農場業務に追われながらの研究で大変だったようです。しかしその後、学科に移られたからは持ち前の根性と努力で文科省の科学研究費を取得するなど大きな成果を上げられました。教育においても正志先生は常に学生の視点に立ち、特に進路指導に力を注がれました。卒業生がマスクミ

3期 外川 裕太

正志先生、先生からいただいた数々のご恩に対して、深く感謝して、果樹チームを代表して一言述べさせていただきます。在学当時、大学3年生を迎えるにあたり、希望のプロジェクトを選択する機会があり、実家が果樹農家の私は迷わず正志先生がいた園芸作経営プロジェクトの果樹チームを専攻しました。当時は、正志先生、小川先輩そして私の3人体制と、非常に少人数でありましたが、その分先生がマンツーマンで教えてくれるため、その内容を濃く、充実した毎日をお過ごさせていたいただいたことを鮮明に覚えています。

4年になると、先輩が卒業した後、後輩の信田さんへ入り、人数が増加するもろんなこと、研究室の賑わいもさらに活気を増しました。正志先生の誕生日を祝うため、サプライズでケーキを準備して皆で食べたの

5期 澤山 美実香

園芸作経営プロジェクトの果樹チームから卒業してまる3年が経ちました。私は卒業後も佐藤正志先生は何度かお世話になったので、その時に見た先生

の元気がお姿と二報いただいた事が、最初全く結びつきませんでした。私と一緒には果樹チームで学んだ二人と連絡を取り合い、写真を引っ張り出し思い出を話した時も、いまいまだに感がわかつています。お葬儀の後、来られたなかった二人と連絡をしようという気持ちで、フィールドセンターの圃場へ行ってみたいという気持ちで、急いで思い出した時に、急に目頭が熱くなり、ようやく実感したのだと思います。圃場の中でも一番早く収穫期が訪れる品種の樹には今年もたくさんの実がなっていて、先生は収穫されたかと思うと、本当に残念でなりません。私達の学年は散々迷惑ばかりをかけてきたのだと思いますが、先生が厳しい言葉を交えながらも、将来のことまで含めて私達の事を深く考えていてくださったこと、果樹学だけでなくたくさんのことを教えていただいたこと、果樹チームで過ごした2年間が本当に楽しかったこと、いつまでも忘れませんが、本当に、本当にありがとうございます。

在校生の近況

卒業研究

今回は、皆さんにとっても特別に思い出深い科目「卒業研究」をテーマとして、4年生に近況報告をしてもらいました。

地域ビジネス革新プロジェクト

4年生 工藤 孝弘

通じて今までより多角的に農業をみたことで、実際の農業現場はもろろん、日々の机上での学習からも感じるようになりました。提出の締め切りが近づく中でうまくまとめられない状況はツライですが、今行なっ

同窓生のみなさん、はじめまして。現4年生の工藤孝弘と申します。紙面をお借りしまして、近況をご報告いたします。私は現在、地域ビジネス革新プロジェクト(旧5プロ)に所属し、卒業研究に追われる日々を送っております。「農業は一筋縄ではないかな」。どこかで聞いたこのフレーズを、卒業研究を



山形県新庄市最上ラズベリー会の会員ハウスにて

いる勉強や経験が将来に必ず活かせることを意識することで、冬を乗り越えたいです。私の卒業研究の内容は、現在秋田県五城目町にて取り組まれている、秋田県産キイチゴの産地化に向けた取り組みについてです。キイチゴが持つ独特の香りと酸味、そして可愛らしい果実の見た目を魅きつけています。私自身も、キイチゴを使用したスイーツを食べると心が踊ります。一方で、現状の秋田県産キイチゴ生産で

私は今、「近赤外光照射が牛凍結融解受精卵の品質に及ぼす影響」というテーマで卒業研究を行っています。屠場で屠畜される雌牛の卵巣は、利用されないまま廃棄されています。廃棄されている卵巣を有効利用し、安定かつ効率的に子牛生産するためには、体外

家畜資源利用推進プロジェクト

4年生 中岡 麻衣

は、他の農作物と比較して多大な労働時間がかかるなど、大きな問題も抱えています。秋田県産の美味しいキイチゴを多くの人が食べ続けることができるよう、今後も努力して研究してい

きたいと思っています。そして、私も、卒業後も本学の大学院にて、キイチゴの産地化に向けた研究に励む予定です。大学院では、それまで見ていなかった視点からも研究を行い、農業

に対してさらに広い視野を持てるようにしたいです。修了後は、大学院で培った知識を武器に、変革が求められる日本の農業に貢献する社会人になりたいと思います。



松風祭での畜産プロの模擬店

受精技術が必要不可欠です。しかし、体外受精で得られた受精卵は、凍結保存してしまうと品質が劣り、妊娠の成功率が高くありません。そこで、凍結受精卵に近赤外光を照射することで品質を改善させ、妊娠率を向上させることを目標に研究を行っています。

私の所属する家畜繁殖学研究室では、これまでの研究で、近赤外領域の光には受精卵の発育を促進する効果があることを示唆して

り、本研究はこの応用となります。私のメインとなる実験は凍結保存した受精卵に近赤外光を当てることなのですが、その以前に、体外受精技術や受精卵の凍結技術の習得が難しく、本題に入るまでに約3ヶ月を要しました。日々、一筋縄ではないかな研究の難しさを実感しています。

新任教員紹介

創刊号発行からの1年の間に、3名の先生がアグリビジネス学科に仲間入りされました。



山本 聡史 先生

平成29年4月から嶋田先生の後任として着任しました山本聡史と申します。農業機械が専門で、露崎先生が筆頭の作物プロに所属し、矢治先生と圃場生産システム学を担当しています。先端技術を積極的に農業機械に取り込んで、省力化と同時に環境に優しい農業の実現を目指します。ドローンや小型農業ロボットの研究を進める予定です。

赤堀 弘和 先生

平成29年4月に椿先生の後任として政策・経営マネジメントプロジェクト(旧6プロ)に着任しました、赤堀弘和です。出身地は岡山県で、着任前の10年間は北海道大学にいました。専門は農産物貿易自由化の経済や環境への影響に関する計量分析です。歳の近い教員として、学生が気軽に相談できるような関係を築いていきたいと思ひます。

伊藤 謙 先生

平成29年11月より小池先生の後任として家畜資源利用推進プロジェクトの助教に着任しております伊藤謙です。これまで鶏と豚を扱い、家畜の栄養と腸管をテーマに研究を進めてきました。大湯キャンパスでは牛を扱えるので、新しいことに挑戦できることが楽しみです。今後もよろしくお願ひいたします。(編集部注:文中の小池先生は江本先生の後任です。つまり、江本→小池→伊藤謙となります。)

一方、研究の合間で、学生生活最後の松風祭で模擬店を出店しました。プロジェクトの仲間6人で300食の焼きそばを販売し、その売り上げで高級焼き肉と美味しいお酒を堪能しました。仲間との励まし合いが、それぞれの研究に大きく繋がっています。あと少しの学生生活ですが、研究、そして青春、どちらも満足のいくまで突き詰めていきたいと思ひます。

プロジェクト名称 新旧対照表 (平成29年4月から新名称になりました)

Table with 2 columns: 旧名称 (略称) and 新名称 (略称). Rows include: 大規模農業経営 (1プロ) to 先進作物生産技術開発 (作物プロ); 園芸作経営 (2プロ) to 先進園芸技術開発 (園芸プロ); 家畜資源循環農業経営 (3プロ) to 家畜資源利用推進 (畜産プロ); 生産環境 (4プロ) to 次世代農業基盤創成 (基盤プロ); アグリビジネスマネジメント (5プロ) to 地域ビジネス革新 (ビジネスプロ); 農業政策研究 (6プロ) to 政策・経営マネジメント (政経プロ).

拡散のお願い

同窓新聞はWebでも閲覧できますー

「秋田県立大学HP」アグリビジネス学科HP「アグリビジネス学科運営ページ」同窓新聞」で、同窓新聞2号と創刊号のPDF版を閲覧できます。昨年、同窓新聞創刊号を皆さんの実家宛に郵送しましたが、「届いていない」という人が多くあります。そこで、同窓の仲間達に同窓新聞が発行されたことと、Webで閲覧できることを知らせてください。

お知らせ



今後の同窓新聞について

4号からはWeb掲載のみとなりますー 3号は平成30年12月発行予定です。1・3・5・7・9期生からの近況報告他を掲載予定です。お楽しみに。3号までは同窓生の皆さんに郵送およびWeb掲載する予定ですが、4号以降はWeb掲載のみとする予定です。ご承知置きください。

同窓新聞の名称を引き続き募集します

この新聞の名称「アグリビジネス学科同窓新聞」は仮称です。正式な名称を引き続き募集中です。奮って応募してください。応募される方は、アグリビジネス学科同窓会担当 神田 啓臣(kanda@akita-pu.ac.jp)までお願いします。